HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	言語学の対象をめぐる二分法再考
著者	栗原，豪彦
引用	北海学園大学人文論集，35：1-39
発行日	2006-11-30

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

言語学の対象をめぐる二分法再考*

栗　原　豪　彦

1．はじめに

言語学における対象や方法論をめぐる二分法や二元論――mind／body，メカニズムとメンタリズム，経験主義か合理主義か，ラングとパロール，あるいはcompetenceとperformance，通時的観点と共時的観点，還元主義（reductionism）と非還元主義（holism）――は，長い歴史において今日に至るまで言語理論や研究モデルの基本理念や研究プログラムと密接にからみ合って依然として論議の対象になっている。

かつて米国構造主義言語学の中核を担ったホケットの『言語学の現況（*The State of the Art*）』（1968）の執筆目的は，当時勢いを増していた生成文法理論の基本教義を批判することにあったが，たいして反響があったとは言えないこのチョムスキー批判の副産物は，20世紀前半の米国における言語学の学説史を内部から見直してみせたことである[1)]。ホケットは1950年代までの米国の言語学の発展を3点にまとめたのち，研究上の合意のなかった「解決されたというよりも敷物の下に掃き隠された」争点として，さらに3点あげている。すなわち，言語の共時態と通時態の関係，音韻論を超えて存在する狭い意味での文法の構想，及び文法と意味の関係の3つである（Hockett，1968：9-10）。

このうち，後の2点はアメリカ構造言語学のいわばアキレス腱として，チョムスキー以前から認識され批判されていたのは周知の通りである。一方，共時態と通時態については，「じゅうぶんに探究されてきたとはいえない（Culler，1986：100f）」ともいわれるが，ヨーロッパはともかく，米国では，ホケットも触れているブルームフィールドの言語変化をめぐる議論

のようなものがなかったわけではない。しかし，この二分法の議論とのからみで活発な議論と誤解の対象となってきたのはむしろ，ラングとパロール，およびその後継二分法たるcompetence（1980年代末以降はI-langauge）とperformanceの区別であり，学説史的にはこの方が興味深く，理論的意味合いも大きい[2)]。本稿では，ソシュールからほぼ一世紀，生成文法も半世紀になろうとしている現在，すでに議論しつくされた感もなくはないこの古くて新しい二分法を学説史の視点から再考し，主要な言語理論と研究モデルの研究対象と方法論に関する二分法とからむ言語観の理論的意味合いや帰結を考察する。まず第2節では言語学の対象と二分法の扱いを伝統の流れとの関連で概略的に跡づけ，第3節では対象を「実体」とみる立場を検討する。第4節では対象の社会性と個人性に焦点をあて，第5章では二分法の相互依存性を多角的に検討する。その過程で対立要因には一部術語ゲーム的側面があること，根本的な言語観の平行性に呼応する二分法をめぐる論議が終焉する見通しがないことを明らかにしたい。

2．言語学の伝統と二分法

ラングとパロールの二分法が敷物の下に掃き隠されずに争点になってきたのは，言うまでもなく，ソシュールから約半世紀後にチョムスキーが導入し，「再解釈としてもっとも影響力を発揮した」（ケルナー，1982：244）competence／performanceの区別とのからみがあるからである。類似しているようで，「根本的な相違」もあるこの2種類の二分法をとりあげるのは今更という感はあるものの，今にいたるまで研究対象と方法論などに無視できない理論的帰結をもたらす対立要因となってきたことから，今の時点で，もう一度，振り返り，争点を多面的に再検討して，その意味合いを考えてみるのも無意味ではないと考えられる。網羅的な見直しはもとより不可能であるが，以下ではこのような視点からこの二分法に関連する主たる争点をたどってみる。

体系機能文法のM.A.K.ハリデイは，かつて純粋に学説史的な視点から，

20世紀の言語学の伝統・系譜を2つに大別してみせたことがある（Parret, 1974：114f)。ひとつは，イエルムスレウの言理学(Glossematics)，トゥルベツコイとプラーグ学派，ファースとロンドン学派（ハリデイはファースの忠実な後継者とは言えないが，ロンドン学派とプラーグ学派の系統に属する)，S・ラムの成層文法，そしてパイクのタグミーミクス理論（Tagmemics）理論，という流れで，言語の民族誌的（ethnographic）あるいは社会学的研究と関連するアプローチ，もう一つは，ブルームフィールド以降の（米国）構造主義とチョムスキーの生成文法に代表される哲学的，論理学的，心理学的スタンスをとる理論で，結合的(combinatorial)・構成主義的な(compositional)伝統の流れである。なお，1960年代末に生成文法と袂を分かった生成意味論は後者から前者に移動したものとハリデイはみる（Parret，1974：116)。その後の言語学界の潮流も考慮すれば，生成意味論の発展形モデルで，1980年代後半から勢いを増している認知言語学は，いくつかの研究モデルからなる連合体というべき派だが，生成文法の理念と研究プログラムと多くの点で鋭く対立しており，前者の流れに属するといえる。

ハリデイによると，この2つの流れを分ける特徴は，前者の伝統が言語を多層的にみること，たとえば文法，音韻論，意味論の3層からなるとする言語観（tristratal view of language）と具現化（realization）を鍵概念としているのに対して，後者は言語を文法と音韻論という2つの層からなると見る観点（bistratal view of language）が特徴だという。似たような見解がラムによっても示されている（Parret，1974：181-2)。ただし，ラムはコペンハーゲン学派のイエルムスレウを通じてソシュールに触れ，プラーグ学派やハリデイの影響を受けているせいか，ブルームフィールドもチョムスキーも単層型（mono-stratal）または無層型（unstratified）だとして，成層文法の多層型(二層から最大五層まで)との対比で批判している。ただし，上で触れたホケットは，ラムに共鳴しながらも，成層文法の想定する層や層の要素は記述の便宜的装置にすぎないとし，言語自体や話者に実在する証拠は得られる見込みがないとしている(Hockett, 1968：32)。

ハリデイはその後も言語習得（発達）に関する「生得派」と「環境派」の対立に関して，前者がチョムスキーに代表される哲学―論理学的伝統を反映して，明確な二分法をとる点で，後者（ハリデイを含む）の民族誌的伝統と対立するとみている(Halliday，1978：17)。このような見方は一応頷けるが，現在でも（とくに米国で）様変わりした言語学のアプローチやモデルを上のような基準で二分できるかどうか，いささか疑問もある。たとえば，生成文法も80年代のGB理論をへて，90年代以降の極小理論(ミニマリスト・プログラム）では，D構造やS構造など純粋に内的な表示レベルが存在しないとみなし，「併合」(merge)という句構造の構成や変換をともに行う操作のみで生まれる統語的構造体が音声形式（運動・知覚系）と論理形式（概念・意図系）という二つのインターフェイスとつながっているという想定にもとづく「文法」のようなものを二層型とみなせるかどうか疑わしい。しかし，ハリデイは別のところでは，言語研究を他の学問分野との複雑な関わりをダイアグラムで表し，対象とする「言語」を，「知識としての言語」，「行動としての言語」及び「芸術としての言語」に3分している(Halliday，1978：11)。師のファース同様，言語学は本来「社会」言語学であるべきだとするハリデイは，社会言語学の研究主題は「言語と社会的人間」ということになり，社会的人間という見方からすると，対立するのは社会と個人ではなく，「社会的」と「心理生理学的」という対照的な見方に分けるべきだとする。さらに，前者は「間有機体的（inter-organizm)」，後者は「有機体内的(intra-organizm)」という視点から区別できるが，両者は相補的だとする(Halliday，1978：8-13)。このような見方からは，言語に対して間有機体的立場をとる理論やモデルは二分法を否定し，有機体内的立場は二分法を支持する立場としてとらえ直すこともできそうに見える。すなわち，生成文法とその分派（語彙機能文法（LFG）や主辞駆動句構造文法（HPSG））を含む形式言語学は後者の立場をとり，言語を社会行動の一環と見るハリデイやラボフらの社会言語学や言語社会学など社会的場面と言語運用を重視する理論では後者の立場をとる傾向があるといえないことはない。しかし，学派の事情はもう少し複雑のようで

ある。

ラングとパロールの区分をある意味で引き継いだチョムスキーの competence／performance は，1980 年代末以降は I 言語（I は〝individual, intentional, intensional〟の意で，ほぼ competence に相当）と E 言語（E は〝external, extensional〟の意で，言語運用とその表れを含む，個人を越えた社会的構成概念。チョムスキーによれば，人工言語なら存在を特定できるが，自然言語では一貫した規定可能な研究対象として存在しないもの（Chomsky, 1995：15-6））と呼び名と概念規定はいくらか変わったものの，研究対象が個人脳内の I 言語だけにしぼられ，言語運用理論（performance theories）については，特定の状況における話し手と聞き手の発話に関する心的決定過程や解釈過程の問題を提起することがそもそも〝unreasonable〟で解明不可能とする姿勢は相変わらずである（Chomsky, 1995：18）。一方，チョムスキーと対立する理論的立場でも，かならずしも二分法に否定的というわけではないことに注意したい。Newmeyer（2000：109, 115）によると，たとえば「形式的機能主義グループ（formal functionalist group）」（例えば，Kuno, Prince, Gundel, L. Horn, Kroch, Milsark, Reinhart, G. Ward など）はプラーグ学派の Functional Sentence Perspective 派と同様，ラングーパロール（及び competence／performance）の区別は否定していない。なお，ソシュールとプラーグ学派の関係は，（とくに音素と共時態と通時態の独創性をめぐり）「簡単にはいかない問題（デ・マウロ，1976：361）」だが，アメリカ構造主義同様，話しことばを重視し，「二分法を受け入れながらも細かい区別にこだわらないことが多かった（ケルナー，1982：237）」と見られている。一方，機能文法でも文法構造と意味と用法（機能）を統合するグループもある。

社会言語学分野におけるハリデイの体系機能文法では，ファースが「社会的プロセスの一部」として言語を扱ってソシュールの二分法や二元論を批判した伝統を受け継ぎ，「社会的記号論」としての言語へのアプローチをとって，同様にラングとパロール及び共時態と通時態，あるいはチョムスキーの competence／peformance の区別を容認しない[3]。ハリデイの社会

的記号論のアプローチは，自然言語の生データを加工せずに扱うエスノメソドロジー(Ethnomethodology)の手法にも似たところがあり，体系的な研究には理想化が必要としながらも，体系的探求と両立しうる限り対象の理想化の程度を低くすべきだとする。このため，二分法に由来する「文法的」(competenceの概念)と「容認可能」(performanceの概念)の区別を認めず，したがって，competenceとperformanceの区別も，ラングとパロールの区別もなく，区別すべきなのはただ具現された実際のもの（the actual）と潜在的なもの（the potential）の区別だけだとする（Parret, 1974：99)。ハリデイのこうした基本姿勢は現在まで一貫している（Halliday, 1978；2006参照)。かつてはラムの成層文法との両立性を強調したハリデイだが，自分の理論の目的は人の相互作用の特徴を解明することであり，話者―聴き手の知識の構成要素を記述の枠組みに介在させる必要がないことを強調しており，最大の関心が話者の脳中の言語知識の特徴の解明だとするラム（の当時の立場）とは対照的である。

一方，米国では社会言語学で言語能力の行使を可能にするコミュニケーション能力（communicative competence）なる概念が「ことばの民族誌」理論のHymes (1972)によって導入された[4]。応用言語学ではこの「コミュニケーション能力」の概念が多くの支持者を獲得しており，二分法的アプローチには批判的である。「コミュニケーション能力」の概念が普及するにつれて，performanceという概念に含められる多様な特徴の中には明らかにcompetenceの一部と考えられるものがある，という見方が生まれ，言語教育にいわゆる「コミュニカティヴ・アプローチ」が採用されるなるきっかけともなった(Widdowson, 1979：9, 12)。ただし，注意すべきは，ハリデイによると，ハイムズの「コミュニケーション能力」は，言語を相互作用として研究する立場でありながら，知識としての言語という観点から扱うことになるため，基本的に間有機体的問題であるものを有機体内の視点で扱うものとみなせることである。この点では機能主義の立場と同様，社会言語学も二分法への姿勢は一枚岩でないところがある。

一方，1970年代に登場する語用論も言語使用や発話行為を正面からとり

あげる立場は共通でも，さまざまなアプローチが共存しており，二分法に関してもかならずしも足並みが揃っていないが，発話行為など文を適切に使用する能力は言語能力に他ならないとする見方が大勢をしめるといってよい。認知語用論の関連性理論（Relevance Theory）では，コミュニケーションにおける言語理解のモデルとして，「コード・モデル」（コード化・コード解読モデル）と「推論モデル」を統合する基本原理として「関連性の原則」を提案している（Sperber & Wilson, 1995: 7ff, 155ff）。最近のモデルでは，competence/performance の概念的区別は否定していないが，語用論的能力（言語使用に関する知識）に関するチョムスキーの見方とは異なり，言語理解のシステムは脳の領域固有的モジュールを構成するとみている。関連性理論が解明をめざす言語理解システムとは，脳内(暗黙の)知識であるＩ言語（能力モデル）とは別物としての言語運用システム（a performance system）であり，運用メカニズムの説明として，言語知識にどうアクセスするかを含め，リアルタイムでの作動方法の記述・説明をめざすとしている（Carston, 2002: 10, 13-4）。一方，Kasher（1977，1995）の語用論ではチョムスキーの文法中心の言語能力（知識）の理論に対応する言語使用の理論を目指しており，語用論能力（pragmatic competence）を「有限の表示可能な構成的規則の柔軟な体系」ととらえ，心理的，生理的コントロールのような要素から切り離すことを提案している。これはチョムスキーの「語用論的知識」やハイムズのコミュニケーション能力に似て，言語運用のモデルというより言語能力の拡張モデルというべきものと考えられる[5)]。

前節で触れたように，二分法を否定する理論として注目すべき認知言語学の「使用依拠アプローチ」は，ハリデイなどとすくなくとも部分的に共通する理念を示しているが，後述するように，いずれかといえば，基本的には「有機体内」文法を重視している。認知言語学の先駆けとなった生成意味論の Lakoff（1973）は，チョムスキーの（当時の）拡大標準理論にもとづく言語・文法観を批判して，言語や文法が well-defined でなく，文法範疇や文法性の判断が程度の問題だとして「ファジー文法」を提唱した。

レイコフは，Chomsky（1965）での〝performance〟が3つの異なる意味で使われていること，一部はcompetenceと区別できないと指摘して，competence／performanceの二分法的規定が用語の操作（「術語ゲーム」）にすぎないと批判した（Lakoff，1973：286f)。「言語運用」という概念が少なくとも生成文法の初期にはあまり明確に規定されたことがなく，competenceでないものすべてが属するもの，と消極的に規定されていたことは哲学者ブーブレス（Bouveresse）も指摘し，言語運用の包括的理論は「まったくユートピア的目標」だと認めながらも，言語運用能力を抜きにした言語能力の理論に疑義を唱えている(Parret，1974：348-50)。ハリデイも同様に，ハイムズに同調して，performanceがcompetence以外のものすべてを指す〝ragbag〟だとしている（Halliday，1978：38)。成層文法から認知言語学へと鞍替えしたラムも同様に,「言語能力は実際には運用能力を意味する」という立場をとる（Parret，1974：209)。認知文法に関しては第5節で詳しく検討するが，ラネカーは，このモデルを「言語体系の実際の使用とその使用に関する話者の知識に本質的な重要性をみとめる。文法は，より一般的な形に包摂されうるかどうかにかかわらず，あらゆる種類の言語慣習についての話者の知識を扱うもの」と定義して，言語運用的な側面と言語知識との不可分性を強調している（Langacker，1987：494，傍点筆者)。当然ながら，理解と産出は，言語体系にとって周辺的というより不可欠なものとされ,「使用事象（usage event)」と呼ばれる実際の言語使用が内的な言語体系の形成と働きを駆動するという想定のもと，言語体系の構造と言語使用において生ずる脳内処理の（蓄積された）行為とはいかなる意味でも別々のものとはされない。個人の言語能力が言語の脳内処理における規則性によって構成されると考えるこの文法観では,「能力(competence)」と「運用（performance)」を峻別するのは意味をなさないと主張される（Kemmer & Barlow，2000：xi)。

以上は，言語学界の主要な理論や研究プログラムにおける二分法の扱いをごく概略的に見たものだが，ここでは扱えなかった諸々の理論やアプローチを含めて現在の言語学は伝統的な二分法や二元論的立場にとらわれ

ない立場とそれにこだわる立場とが混在しているものの，研究プログラムの多様化に伴い，二分法遵守派は全体としてやや旗色が悪いという見方ができる。月並みな要約になるが，問題の二分法の議論が示唆するのは，抽象度の高い対象を設定する立場と抽象度を下げて具体的言語現象も対象とする立場が混在していることは言語が社会的側面と抽象度・理想度の扱いに関して多面的アプローチを許容する現象だということである。

3．「実体・もの」としての言語学の対象

問題の二分法が言語学の研究対象の同定に関して導入されて以来の論争には言語を「実体」または「もの」として捉える実在論をめぐる議論がある[6]。ここでは，ラングとパロールの多義的，複合的規定が誘った長年の議論で明らかになった知見に照らして，「もの・実体」をめぐる議論の意味合いを考えてみる。

まずは，この厄介な問題をあえて振り返ってみるきっかけとして哲学者土屋（2005）の学説史視点からのやや挑発的な問題提起を検討してみよう。土屋は，まず，分野を問わず，科学的研究はその対象を明らかにすることではじめて可能になることから，言語学が科学として自立するためには，言語という研究対象がたしかに存在して，それが別個の科学の研究対象であることを明らかにしなくてはならなかった事情を確認する。つまり，言語は一般的認知現象としてではなく，言語的要素の認知という区分可能な認知現象として（科学的な研究対象となりうるものとして）確立される必要があった。近代から現代にかけての言語学の成立とは，言語という対象の存在と区別可能性とを確立することを前提としてはじめて可能になった。しかし，（ソシュール以後）世界の領域的区分は複雑化し，それぞれの分野が別個の方法と記述方式を必要とするというような単純なものではなく，科学研究の目的が世界の体系的記述だけではもはやないという現実からすれば，このような現代の主流の言語学が前提とする科学観は時代遅れであるという。土屋は，ダーウィンの進化論を参考にして考案されたシュ

ライヒャーの言語系統樹で生物学での種に対応するものとして想定されている言語，つまり人間の営為としての言語というよりもひとつひとつのもの（シュライヒヤーの「自然の有機体」）として想定された個別の，しかし抽象的な実体（共時態のラング）が近代言語学の言語実体観の端緒だとみる。そして，ここからソシュールをへてチョムスキーにいたるラング＝言語能力という研究対象が直線的に発生しているが，違いは，チョムスキーがラングに相当するcompetenceの中心をなすものとしてはじめて文を研究対象としてとりあげたことだという。いずれにせよ，こうして個々人の営為としての言語使用や言語的活動からは独立の実体的な対象として理解されることになったが，その過程ではブルームフィールドの科学観の展開もからんでいるものの，チョムスキーにいたって，言語学が対象とする能力が実体であるという矛盾をかかえることになったとする。能力は可能性であり，それ自体で存立するといえる実体的なものではありえない。可能性とは実現することもあればないこともあるが，そうしたものに実体らしさを与えようとするひとつの考え方が生物学還元主義だという。人という種に特有の普遍的能力たる言語の研究がこれも人に普遍的な脳という生物器官に還元した研究となるが，これはそれ自体が独自に存立する現象の領域としての言語というそもそもの前提を放棄した逸脱になると土屋は主張する。

土屋は，第二の考え方として，言語といわれるものが問題になるあらゆる局面について，とりたてて方法論を限定しないで考察し，いわば科学的探究の成果の「ごった煮」として言語の研究を特徴づけるという道もあるが，ごった煮的行き方も「実体としての言語を追求してきた近代言語学の道から逸脱している」という。これ以外の可能性もあることを否定はしないが，いずれにしても同様の困難に出会うと言い，現代の「科学的」言語学は前後左右どちらにも行けない行き詰まり状況にあるとし，今までの「時代遅れ」の言語学に代わる新たな学際的なアプローチのパラダイムが必要だと主張する。

「新しいパラダイム」とは何かは明かされていないが，個々人の言語使用

や言語活動のダイナミックな営為や過程の諸相を諸科学の垣根を越えて総合的に，しかし「ごった煮」でない形でとらえるようなものを想定しているものと推測される[7]。このような見解を包括的に議論するのは本稿の範囲を超えるので，ここでは，とりあえず，明らかに誤解と思われる点だけを指摘しておきたい。まず，「ラング＝competence」という図式はチョムスキー自身が否定しているように，不正確である。次に，ラングに相当するcompetenceの中核として文をとりあげたのはチョムスキーが最初ではない。また，程度問題ではあるが，生成文法も認知言語学でも認知科学や脳科学などの知見や「証拠」をとりこむ学際的研究方略をとっていることも周知のことである。これらを確認した上で，ソシュールやチョムスキーが「実体」としての言語―固定的で静的なシステムを対象としたとする見方を検証してみる。

素朴な意味合いでは土屋の見方は頷けるところもあるが，ソシュールでもチョムスキーでも言語学の対象を「実体」とか「もの」という表現で一括できるほど，単純な概念規定をしているわけではないことをまず確認する必要がある。まずは，ソシュールがCLGの序説の冒頭で，「言語学の不可欠かつ具体的な対象が何か」をきめる問題が「とくに困難である」と述べていることを想起しておきたい(CLG，23)[8]。ソシュールのラングが「実体」と解釈できるのは，たとえば「ラングがパロールと同様に，具体的性質をもつ対象であることが研究のためには大きな利点である。言語記号は本質的に心的であるが，かといって抽象物でない。集団的合意によって認められ，その総体がラングを構成する諸々の連合は，その座を脳にもつ実在である。さらに，ラングの記号はいわば蝕知可能である」(CLG，30)という説明やよく引用される「ラングは……パロールの運用によって同一共同体に属する主体たちのなかに貯蔵された財宝であり，各人の脳のなかに，より正確には，個人の集合のなかに潜在的に存在する文法システムである」(CLG，30)といった解説からであろう。繰り返し指摘されてきた通り，「心的」であり，「システム」，であり，かつ「財宝」とみなすのはたしかに「矛盾」にみえる（ガデ，1885：126）が，「言語は実在体（une entité）ではな

く，話す主体を離れては存在しない」(CLG，19，n.1)という注釈からは，少なくとも実在論的とは断定できない複合的な概念と考えていたことがわかる。なお，この〝entité″という用語は「実体」観を誘いやすいが，これについては，丸山（1983：72，143，205-7）が，ソシュール自身が『原資料』(SM 117 (1710))で，言語という「我々が当面するのは，有機体でも物体でもないのだ」として，「実体概念」というより「関係概念」として捉えていたことを強調している（丸山は〝entité″に「本質体」という訳語を当てている)。さらに，丸山は，ランガージュとラングの峻別に関連して，「ラングは，社会的実現という意味で顕在化していても，決して具体的・物理的な実体ではない。(……) 個人の頭脳に作られる心的な構造」であると注意を促してもいる（丸山，1981：83)。なお，古くは，Wells (1947) の書評でもソシュールの「具体的 (concrete)」という概念を論じて，この語の抽象度に触れていることを指摘しておく(Joos，1957：15)。ラングに関する「社会的産物」とか「社会的事実」，「社会制度」あるいは「社会的コード」などという表現も静態だから「実体」だというなら，なんらかの仕方で定めた対象はすべて「実体」として捉えることができることになろう。

さて，ソシュールとチョムスキーの二分法を同一視できないのはすでに周知のことだが，チョムスキーは，competence とラングとの類似性を問われて，次のように説明したことがある。「これまで繰り返し指摘してきたことだが，密接な類似性はある。しかし，根本的な相違もある。つまり，私は生成文法を単に統合軸 (the syntagmatic axis) に沿ったある種の関係をもつ一連の構造的目録としてではなく，言語能力 (competence) の説明とみなしたい(Parret，1974：35)」。最近では，たとえば，Belletti & Rizzi (2002) も Chomsky との対談でソシュールとチョムスキーの間には対象や研究パラダイムそのものに断絶があると述べている (Belletti & Rizzi，2002：1)。この「断絶」はとくに（「記述的妥当性と説明的妥当性の緊張関係」が生じた）1980年代以降のアプローチに顕著である。したがって，かつてはともかく，ラングと competence という異なる概念をともに「実体」とみて，チョムスキーをソシュールと同じまな板に載せて批判するのはい

ささか無理がある。

現在の生成文法はできるだけ多くのものに原理的説明を与えるための「極小理論プログラム」を掲げ，「生物言語学（biolinguistics）」とも呼ばれるが，「生物学還元主義」とされるのは，言語を心的な現象であることは認めながら，生得的な生物学特性として脳の一部に他の認知能力には還元できない別のモジュラーとして言語機能という（生物学的）器官を想定し，「普遍文法（UG）」たる初期状態が必要な言語入力（刺激）を受けて安定状態に達した段階の言語能力（comptence または I 言語）を研究対象とすることによる。「心・脳のある状態（Chomsky，1995：17）」とされる I 言語や初期状態の UG が実体かどうかの議論は，結局は水かけ論にすぎない。生成文法での competence や I 言語の概念が，文を中心とする統語論を中核に据え「規則に支配された創造性」を重視する文法観もさることながら，「人間の言語は生物学的対象物である」という表現や，脳にあるものは「言語表現の音や意味や構造的組みたてに関する情報の特徴記述のための特定の手続きである。理論的説明の選択は視覚や免疫系の場合と同様に，けっして恣意的なものではない」という説明からももはやソシュールとは似て非なる概念規定になっていることは明らかである（Chomsky，2002：126）。こうした脳内の「普遍文法」や「言語能力」＝「計算システムとしての I 言語」が固定した「存在物」と受けとられがちであるのを承知の上で，方法論上，実在論的立場をとることをチョムスキーは一度ならず述べている[9]。たとえば，「心に関するはなしは，脳のある物理的体系の特性に関する適切なレベルの抽象化の話（Chomsky，2004：60）」という立場にたつチョムスキーは，文法の脳内表示に関する議論で使う「心，究極的には脳（in the mind, ultimately the brain）」という表現が一元論か二元論かの問題を避けるためであると語っている（Chomsky，2004：60-61）。すなわち，「（……）我々が今やっていることが二元論へ導くことは全くないが，逆に二元論を反証するようなこともない。心（mind）に関する議論は，脳内のある物理的システムの特性について，適切なレベルでの抽象化の話にすぎないと理解することができる（Chomsky，2004：60）」。次のくだりも同様に「実体」

観を警戒する慎重な言いまわしになっている。「たとえば，脳の内に文法の諸規則が本当にあると言う場合，何を意味しているのだろうか。それが厳密に何を意味しているのかは正確にはわからない。誰も「α 移動」に対応するニューロンが存在するなどとは考えない。我々はともかく脳の一般的な構造特性について語っているわけで，脳でもどんなシステムでも，一般的特性を備えているということが何を意味しているかということに関しては，本当に重要な問題があるわけである（Chomsky，2004：58)」。

チョムスキーはさらに，一般的特性をコンピュータが計算を行うようにプログラムされているという場合に喩え，「複雑なシステムに一般的で抽象的な特性を帰着させるような陳述が「真である」とはどういうことなのかをもっと正確に把握すべく考察を進めるべきだ」と言い，物理学ではこういうものが実在するということが受け入れられるようになった（つまり，知的ブレークスルーが起こった）ため，こうした問題は生じないが，言語の研究ではまだこの知的ブレークスルーは起こっていない，とも言う(Chomsky，2004：58)。

似たような議論はほかの生物言語学者によっても展開されている（Jenkins，2000：15f)。ただし，こうしたチョムスキーのお得意のアナロジー，つまり太陽の核融合とかクウォークのような原子より小さい単位の実在性と言語規則や言語記号との類比については，MacWhinney (2000：122) も指摘するように，誤解を招きやすい。つまり，クウォークの存在は大規模な実験によって証明可能だが，言語の諸規則も記号や単位も自然科学におけるような証拠が得られる見通しはない。この違いはけっして小さくないにもかかわらず，生成文法で「事実上概念的な必然性をもつ（virtually conceptually necessary)」と主張される文法記述における「理論内の(theory-internal)」概念や規則や操作(極小理論における〝merge″，〝copy″，〝displacement″ など）の心的信憑性については今も批判が絶えない(Postal，2003，2004 などを参照)。一方，対立する認知言語学では「認知的妥当性が確立している道具立てのみ」（Langacker，2000：3）を使い，概念的統合を行なって認知的・言語的要素を安易に仮定しないというタテ

マエをとっているが，認知作用に関する概念や用語も人工的な術語である限り，こうした問題を免れる保障はない。要するに，程度の問題というべきであろう。いずれにせよ，自然科学的方法論を使うことと言語の説明に特有の概念の心的実在性や認知的妥当性を判断する基準や「証拠」が自然科学と同類とみなすことは無理があるといわざるをえない。

「実体」という点では，認知言語学の「文法観」は，たしかにチョムスキーの「原理」優先の研究プログラムと一見対照的である。すなわち，このモデルの特徴は次のような立場に表われている。「ある目的のためには，言語知識や能力をある言語の「文法」と呼ぶもので具体化することも役立つ。しかし，それを別個の，または境界のはっきりした認知的存在物と考える誘惑には逆らわなくてはいけない。たとえその理由が，単にある構造が慣例的だとか言語的だとか，あるいは単位であるとかという特徴づけをすることが本来程度の問題だからだとしてもである（Langacker，2000：9)」として，実体的でないことを強調する。しかし，能力と呼ぶ限りは「実体」とは無縁だというのなら，生成文法のＩ言語でも同様の理屈が使えることになる。大きな違いのひとつは，認知言語学の「使用依存モデル（usage-based model)」が言語を使う主体を前面にたてる言語能力観にもとづき，「言語体系の心的表示」としての「脳内」文法を記述対象としていても，それを言語使用によって形成され，維持され，修正されるたえず進化する一連の認知的ルーチン（筆者注：「言語単位」に相当。ルーチン化は「定着(entrenchment)」とも「習慣化（habit formation)」とも呼ばれる）として動的にとらえる見方をとる点である。ラネカーによると，「話者の言語「知識」とは，したがって，宣言型（declarative）というより手続き型（procedural）のものであり，言語の文法は（心的，知覚的，物理的な）言語能力に等しいものとみなされるが，それは必ずしも自律的または境界の明確な(well-delimited）な心的存在ではない。もっと明確に言えば，言語の文法は，確立した言語慣習の話者の理解力の在り処としての認知的組織の諸相であると規定される。その特徴は，慣例的な言語単位の構造化された目録である(Langacker，1987：57)」。この言語能力観は，「自然言語の能力と

は，その項目と構造のすべてを習得することから成り立つ（……）そうしたものは形式的アプローチの「核文法」よりもはるかに複雑で多様な言語表示を構成する（Tomasello，2003：5-6)」という説明にも表れている。

認知言語学の対象とする境界の定まらない柔軟な「文法」や「構造的目録」は「実体」と呼びにくいことは確かだが，一方で，ラングやcompetenceや「能力」のように方法論上想定される概念的対象を一括して「実体」とか「もの」とみなすのはいささか強引な議論に思われる。この論理を使えば，脳中にある抽象化された能力でも，実際に表出される言語行動や発話行為でも研究対象として設定されるものは「実体」とか「もの」とみなしうるわけで，そうしたなんらかの形で画定された対象概念を実体と批判するのは，〝strawman argument〟に似て，いささか不毛な議論というべきであろう。

4．二分法における社会性と個人性

周知のように，ソシュールの二分法の規定には社会的側面と個人的側面がからんでいる。第二節で触れたことだが，ハリデイの社会記号論的アプローチのように，はじめから言語を社会的人間との関係でとらえる立場では，社会と個人が対立概念とならないが，ここではCLGと『原資料』との間にある相違を含めて，ソシュールの二分法にみられる社会と個人の対立にかかわる問題をとりあげて考察する。

ソシュールが「第一の原理」とみなしたラング・パロールの区別をめぐっては，3回の実際の講義の順序とは異なるCLGでの提示の順序と方法のため，「漠然と漂っている」（ガデ，1995：124）と言われた問題が生じた。ラング・パロールの複合的で一見矛盾をはらんだ定義は，この区別が長年の紆余曲折をへて晩年（1911年頃）に到達したためであることはよく知られている（ケルナー，1982：228-9)。定義の要点そのものは，CLGと『原資料』とで大きな違いがないので，ここでは，CLGにある「言語活動（ランガージュ）には個人的側面と社会的側面があり，一方を抜きに他方を考

えることはできない」(CLG, 24)という見方をまず確認しておく。さらに，「もし言語活動を一どきに数面から研究するならば，言語学の対象は，相互に何らの連絡もない異質物の寄集めとなる。かような場合には，心理学，人類学，規範文法，文献学などといった，数多くの科学に門戸をひらくことになる（CLG，24，小林訳，18」という理由から，一般的な言語活動・言語（記号化）能力である「ランガージュ」からラングとパロールが（便宜的に)区別されることになったが，ソシュールにとって，「言語活動の能力の社会的産物で，同時にこの能力の行使を許すように社会団体が採用した必要な慣習（制約）（conventions）の総体」（CLG，25）であるラングと「個人が常にその主人」である「遂行的局面」（CLG，30）のパロールを区別する主な戦略的機能は，前節で触れた「とくに困難な」言語学の研究対象を分離して取り出すことだった（Culler，1986：40 参照）といわれるゆえんである。いずれにしても，二分法と社会と個人の振り分けの経緯については，一般的な言語変化の問題，とくに「類推という現象を説明するさいの(CLG, 223ff)，共時態と通時態の区別を支えるためにソシュールがラングとパロールを峻別する必要を感じ」，「ラングとパロールの区別が段階的に立てられて行き，まず最初に社会と個人の対立関係が逆の順序で着想され，次いで今ではさらによく知られたこの区別に到達した（ケルナー，1982：226)」事情を念頭におく必要がある。

「共時態のラング」の規定の複雑さについては，CLG だけを参照しても「ひとを困惑させるもの（ケルナー，1982：222)」という見方もあるが，米国ではじめて CLG（第二版）のごく短い書評を通してソシュールを好意的に紹介したブルームフィールドは，共時態・通時態の区別も含めてこの二分法を支持する一方，社会性と個人性のからむ二分法の多義性や矛盾には触れず，研究対象をラング的なものに設定する理由も，「実際の発話—パロールは体系により固定してない事柄(例として，各音の正確な音の性質)に関してのみならず，体系そのものに関しても変異する，つまりさまざまな話者がときには，体系のあらゆる特徴に違反する」とし，ソシュールへの共鳴を強調している(Bloomfiled, 1923＝Hockett, 1970：107)。ブルー

ムフィールドは，Jespersenの書評(Bloomfield, 1927)でも，言語学が「社会の話者全員に共通の言語の特徴，ソシュールの『ラング』しか扱うことができない」として，イエスペルセンの「表現様式」がパロールを扱っていると批判的にとらえている(Hockett, 1970：141)[10]。ブルームフィールドより20年以上後のWells(1947)の書評は，「ソシュール全体にわたる最良の論考のひとつ（デ・マウロ，1976：355)」とも，「多くの点で今なおこれを凌ぐものが出ていない（ケルナー，1982：236)」といわれる定評あるものだが，やはり二分法を支持しながらも，問題のラングの定義の二面性や社会と個人との交錯にはほとんど触れていない（Wells, 1947；Joos, 1957：9)。これは，両者とも後年発見される『原資料』は知る由もなかったわけで当然といえば当然である。ただし，ブルームフィールドは主著『言語』(Bloomfield, 1933）でも，社会的規範としての「ラング」の考えに言及している。また，後年のチョムスキーを先取りするように，ブルームフィールドはソシュールがラングの単位を語や固定した慣用句のようなものに限定することには異議を唱えて,「ソシュールとの主な違いは自分の分析対象の基礎が文である」ことを宣言し，ソシュールの（語や固定表現を単位とする）方法では語形成や統語論でときにかなり複雑な結果が生ずると述べている(Bloomfield, 1923：LBA, 107f)。ちなみに，ブルームフィールドは，ソシュールから大きな影響を受けたとヤコブソンに語ったとされ(デ・マウロ，1976：xxxviii)，ホケットもソシュールのブルームフィールドへの影響に触れている（Hockett, 1968：11）が，*Language*（1933）でもソシュールへの言及がほんの儀礼程度にすぎないことは，ブルームフィールドの行動主義への傾斜を反映したものと考えられ，ある種の憶測の対象にもなった[11]。

チョムスキーがソシュールに言及しはじめるのは1962年前後からで，Chomsky(1965)，Chomsky(1966)，Chomsky(1968)などで，competenceの概念規定でのソシュールとの相違点も強調するようになる。このことについて，ホケットも，チョムスキーとソシュールとの相違に触れて，ソシュールにある社会と個人のあいまい性を指摘する。「知ってか知らずか,

ソシュールは langue／parole の対語にたがいに交差しあう 2 つの対照をもち込んだ」とし，その理由として，「ときにはラングは「習慣」を，パロールは「行動」を意味するのに，あるときはラングが「社会的規範」を表す一方，パロールは「個人の習慣」を意味する，という」錯綜した規定をとりあげている（Hockett，1968：15）。しかし，ホケットがソシュールの社会と個人の関係を持ち出してチョムスキーを批判したのは，competence がラングの規定にある社会的側面を無視していることではなく，研究対象としての competence の概念そのものに対してである。つまり，言語学者の追求する理論とは，観察された事実からの一般化であり，それは speech（「パロール」）に関するものでなくてはならない，というものである[12]。伝統的な「科学」の定義に合致していると Hockett が自負するこの見方は，言語学が目指すべきものは実際の発話データの一般化であるべきだ，という構造主義者らしい主張である。実際のことばにみられる規則性は，結局のところ，言語使用者の脳中の言語習慣の問題であり，これを「言語」と称する以上，それは speech に関する理論化の一部であり，「言語」（ラングや competence）に関するもうひとつ別の理論がありうるかのごとく装う（pretend）のは理解できないという（Hockett，1968：65f。傍点筆者）[13]。Hockett（1968：15，64f）は，こうしたチョムスキー批判のついでに，ソシュールが同じ「罠にはまっている」ことを指摘している。それは，第 5 節で触れるように，ソシュールが「語る主体におけることばの言語学」としての「パロールの言語学」（講義Ⅲで予告されながら実現しなかった）と「ラングの言語学」という別々の言語学があると述べたことに向けられている。なお，ホケットのチョムスキー批判の要点は，チョムスキーが言語は well-defined system だという（観察では支持できない）想定にもとづいて，「漠然とした基底のシステム」という「架空の存在」としての言語を設定したため，「基底のシスム」を経験科学の方法論の及ばない彼方へ追いやったという点である（Hockett，1968：66）。

さて，ラングとパロールの規定における社会と個人のかかわりに戻ると，ハウスホルダーも Householder（1970）において，上述の「交差」に関す

るHockettの2つの見方をとりあげ，第一の対比では，まずラングはむしろ，「文法（つまり，言語能力文法（competence grammar））」または「体系」または「構造」に等しく，一方パロールは「発話」または「言語運用(performance)」とみなしたいとした。また，ホケットのもう一対の対照については，ラングはある社会集団に「共通の文法的核」であり，一方パロールは「個人語」または「個人の文法」とみるならば，最初の対比ではラングだったものが第二の対比ではパロールになりうる，とする。社会集団の規模は多様なので，第二の意味では，パロールが一人からなる社会集団のラングである（ただし，かりにこうした限定的な場合が認められば）という，competence／performanceの二分法も意識したやや複雑な議論を展開してみせた。

ホケットもハウスホルダーもCLGのみを参照し，ソシュールの「混乱」の由来には触れていないが，こうした複雑な論議を呼ぶラングとパロールの規定にからむ個人と社会（集団）の解釈について，ハリデイやハイムズに近い立場をとるウィドウソンは，いったん言語を社会的コンテクストにおいてみれば，「共通の均質的な体系」という概念が「空想の絵空事」にすぎないことが明らかになる，として二分法そのものの可能性を否定しているWiddowson（1979：10)。

ついでながら，社会と個人の関係について，CLGと矛盾する印象を与える講義Iの『原資料』（SM 19（2560)，丸山，1981：273）を少し見ておこう：

「人が語るためにはラングの宝庫がつねに必要であるというのも事実であるが，それとは逆に，ラングに入るものはまずパロールにおいて何回も試みられ，その結果，持続可能な刻印を生み出すまでくり返されたものである。ラングとはパロールによって喚起されたものの容認にすぎない。(……)ディスクールの要請によって口にされるすべてのもの，そして個別の操作によって，表現されるものはすべてパロールである。個人の脳に含まれるすべて，耳に入り自らも実践した形態とその意味の寄託，これがラングである。

この二つの領域のうち，パロールの領域はより社会的であり，もう一方はより完全に個人的なものである。ラングは個人の貯蔵庫である。ラングに入るもの，すなわち頭に入るものはすべて個人的なものである。(丸山，1983：88-9)」

しかし，上ではラングの個人性とパロールの社会性が浮き彫りにされたが，その後の「ラング，パロールの区別再考」では，最終的に，ラングが社会的であり，「個人が受動的に記録する産物」であるのに対して，パロールが「意志と知性の個人的行為」として社会的側面と個人的側面が振り分けられた。この振り分けそのものについて，ラボフが「ソシュールのパラドックス(the Saussurean Paradox)」と呼ぶ問題が生じた(Labov，1970：32；1972：267)。これは言語変化における個人の言語の役割にかかわる議論で知られるようになったが，とくに社会言語学者のアプローチでは避けがたいものになる。「パラドックス」は次のような意味合いである。すなわち，ラングが「社会的」なもので，言語共同体の全員が共有することばの能力(「文法システム」)であるならば，研究対象として，いかなる個人(研究者自身も含む）の言語をとりあげてもよいことになる。しかし，一方，ラングの行使としてのパロールである個人のことばは（少なくとも社会言語学のデータ収集の手法に関して）現実の社会的場面における社会学的調査によってのみ調査することができる。このため，ソシュールの二分法は，「言語の社会的側面は人目につかない個人の研究室で研究できるが，一方，個人的側面は，言語共同体の中心での社会的調査を必要とする」という本質的矛盾を含むというのである(Labov，1972：267)。ラボフは，ホケット同様，ソシュールの langue／parole 及び共時態と通時態の二分法だけでなく，チョムスキーの competence／performance の区別にも反対する。ただし，「ソシュールのパラドックス」とされるものが本当の意味で「パラドックス」といえるかどうかについては議論もある（Pateman，1987 参照)。CLG (38) には他にも誤解を誘う比喩や公式がある：「ラングは，各（個人の）脳中に貯えられた印象の総和のかたちをなして，集団のうちに存在するので，それはちょうど同じ辞書を各人が一部ずつ所有しているのに似て

いる」という比喩や，「すべてのひとに共通で，かつ保管者の意思の外にありながら各人がそれぞれ所有する」ラングの存在様式を「1＋1＋1＋1…＝I(集団的モデル)」という公式で表示しているところである。この公式はいかにも単純すぎて，個人性と社会性の混在に関して，とくに等号の部分が誤解を招きやすい。一方，「集団的なものはひとつもなく，ただ個人的なものに終始する」というパロールの公式，「(1＋1′＋1″＋1‴……)」も集団的モデル（I）としてのラングとの相互依存関係や社会集団のひとりという面がいっさい表されない非現実的な公式にみえる[14]。

いずれにせよ，ソシュールに見られる対象としての言語と社会（集団）と個人の関係は，ラングとパロールの相互依存性とからんで，いずれか一方にみられるというより，「社会的事実のそれぞれに異なったアスペクトを表して（……）ラング，パロールともに，その社会的側面と個人的側面を有している」(丸山，1981：274）と見る方が妥当であろう。一方，二分法を引き継いだとされるチョムスキーでは研究対象が個人のcompetenceまたは「I言語」であって，はじめから社会的側面は想定外で，ソシュールの規定にあるような社会と個人の緊張関係は少なくとも表面上は起こりようがない。生成文法が社会との関わりを考慮していないという批判は当初からあるが，チョムスキー自身は，「すぐれた言語学(very good linguistics)は社会的または社会学的メタ理論抜きで行われるし，これまで常にそうだった」と述べて社会的側面を意図的に捨象していることを強調している(Parret，1974：53)。ただし，最近の「E言語」という概念は，I言語との対比から「社会的または超個人的な構成物（Smith，2004：29)」というソシュール初期のパロールの定義に似てなくもない。いずれにせよ，このような対象設定も結局のところ，研究プログラムの本質的な違いを反映しているという他はない。しかし，すでに見たように，ハリデイのような社会言語学的アプローチが二分法をとらない論拠は，まさにこの二面が相互依存関係にあることにある。ハリデイによれば，「言語行動は能力の一種であり，言語の社会的側面（人間同士のコミュニケーション）に注意を集中していても，個人にそのように行動することを可能にする能力という観点

から，そうした外側の行動を見ることができる」として，「行動としての言語」と「能力としての言語」という二つの観点は相補的であると同時に，切り離せないものとみるのが理にかなっているという（Halliday，1978：13)。次節では，相互作用と相補性を強調するこうした見方を考えてみる。

5．二分法における相互依存性——「にわとりと卵」

社会的側面と個人的側面の相関の間で見え隠れする相互依存性（またはハリデイの相補性）は，二分法を採るにせよ，否定するにせよ，厄介な言語の本質にかかわっている。

R・ウェルズは，CLGの定評ある古典的書評で，ラングという概念が研究対象として苦心の結果ひねりだされた理想化・単純化された近似値にすぎないことをソシュール自身が自覚していたことを指摘し，ラングとパロールの相互依存性を「にわとりと卵」の関係に喩えた(Wells, 1947, Joos, 1957：9)。にわとりと卵の喩えは言い得て妙というべきであるが，もちろんこれはどちらが先かを決め難いものの喩えであり，2つの対象が存在すること自体を否定するものではない。したがって，言語に2つの概念的側面を認めない立場や言語と社会（的人間）が統一体とみる立場ではこの比喩自体が不適切だということになる。

「相互依存」ということばは，ソシュール自身がCLGの言語獲得に関する次のくだりで使っている。「そもそもある観念とことばのイメージ(image verbale）との連合は，パロール行為の中でつかまえたのでないとしたら，どうして人はその連合を思いついたのだろうか。一方，われわれが母語を習得するのは他人のことばを聞くことによる；母語が脳中に沈殿するには数えきれない経験を経なくてはならない。最後に，言語を進化させるのはパロールである：われわれの言語習慣を変化させるものは他人のことばを聞いて受けた印象である。それゆえ，ラングとパロールは相互依存である（CLG，37)」。同所の直前では（『原資料』に対応箇所ある）にわとりと卵の比喩をにおわせ，「ラングが成立するにはパロールが必要であ

る；歴史的にみれば，パロール的事実が常に先行している」ことを認めている。こうした相互依存性とパロールの重要性を認識しながらも，ソシュールがこの二分法を「第一原理」としたのは，すでに触れたが，言語学を独立の科学とする言語理論家としてのソシュールにとっては，ラングがパロールの先行条件とならざるをえなかった「事情」があるともいわれる（ケルナー，1982：227)。

相互依存性を認めても二分法を対象設定に持ち込むか，あるいは相互依存性を肝要な特性として，研究対象として互いを切り離せないものとみるのか，この2つの行きかたは言語に関わる多くの問題への取り組みかたに重要な違いをもたらす。カラーが「多くの言語学上の不一致は，区別そのものではなく，なにがラングに属するか，なにがパロールに属するかの区別は厳密にはどういうことかに関する論争というかたちに整理できる」(Culler，1986：96) と述べているのは過去の学説史では妥当な見方だったかもしれないが，今はもう少し事情が複雑であるのはすでに見たとおりである。

ラング・パロールの区別は，ソシュールをあまり読まない米国の構造言語学者でも大方の合意事項だったとされるが(Joos，1957：18)，Chomskyの再解釈によって，言語研究上この種の区別の必要性はゆるぎないとみられていた時期があったことは確かである。1970年代にケルナーは，「今日の言語学者にとって，ことにlangueとparoleの区別がチョムスキーの『諸相』(＝Chomsky，1965)において重要な支点のひとつとして見直されて以来(Chomsky，1965：4を参照)，本来の言語学がlangue，すなわち社会的コードとその規定をなすことばの操作体系を取り扱うという見方はほとんど完全な一致を見るに至った」(ケルナー，1982：230-31)と楽観的に総括してみせたが，上述の通り，ロンドン学派やハリデイの体系機能文法，さらにハイムズやラボフらの社会言語学は当初からこの区別に懐疑的であり，さらに近年の認知言語学の出現によって，その存立基盤の理念はおおきく揺らいでいる。

ラングとパロールの相互依存性を認めながらも，speech（パロール）と

language（ラング）のふたつが「ある」のだから，それぞれがある意味で独立した「研究対象」だと考えることがホケットの言うように「明らかに間違っている」（Hockett，1968；65）かどうかは当然議論の余地がある。ソシュールは，すでに触れたとおり，ラングとパロールが相互依存の関係であると同時に，「両者の特質があまりに似通っていないので，それぞれ別の理論を必要とするということも事実である」として「ラングの言語学とパロールの言語学を二つ別々に考えることができる」ことを認めている。多くの誤解と議論を呼んだこの部分に深入りすることは避けなくてはならないが，ソシュールのいう「パロールの言語学」がホケットのような speech を通じての言語の一般化という意味でないことは確かであるものの，個人の意志によるパロール的言語現象をまるごと扱う「ごった煮」的言語学を想定していたかどうか不明である。しかし，ラングの研究へのパロールの関与については，『原資料』の「ラングの言語学をあつかう時，パロールの言語学に少しでも立ち入ってはならないなどと結論してはいけない。そうすることは有用であろう。ただ，その仕事は隣接領域から理論を借用するということなのだ（SM 123（342，367，370），丸山，1981：85）」という説明から学際的アプローチが避けられないことを示唆しているものと推測できる。

ホケットは，チョムスキーが個人の脳内に competence という理想化された抽象的対象を設定することについて，理想化はその意図された役割を果たす限りは理論で使うことは認めるものの，理想化自体は分析対象でも研究材料（対象）ではなく，「現実の対象物やシステムを分析し論じるための術語装置」にすぎないと批判する。ホケットは，言語が well-defined だという Chomsky の想定を破棄すれば，その理想化（「完全に均質的な言語共同体における理想的な話者・聴者」）が無用のものとなり，それより日常的な表現に直して（現実と同様にさまざまな欠陥のある）「平均的または典型的な（言語）使用者」というほうがましだという，いかにもフィールドワーク重視の構造主義的見方を示している（Hockett，1968：66-7）[15]。ここで問題にされていることは，対象の抽象度と理想化の度合いを下げるこ

とにより，二分法の境界が必要なくなるという観点である。ハリデイらの社会言語学的アプローチもその例であろう。

つまるところ，理論や研究プログラムの根本的な違いは最終的に解明しようとする対象の性質に行き着く。Chomsky理論の要とされるwell-definitionの問題は理論上の約定(stipulation)にすぎないとしても，日常の言語の平均的または典型的使用者の言語使用の観察と内省から得られた言語事実の一般化や規則性はspeech（言語運用）の混質的現象に関するものか，あるいは言語共同体の（ほぼ）全員に共有された抽象的な言語能力か，それとも能力と運用が統合されたものか，それぞれの立場が対象の設定にあたり用意する原理的理由（rationale）が問われなくてはならないことになる。このうち，3番目の立場と思われるある意味で革新的な認知言語学の理念を再度検討してみよう。

認知言語学は，すでに触れたとおり，ハリデイらの社会行動としての言語観とは異なるが，二分法の垣根を取り払った「ひとつの言語学」をかかげている。この「使用依拠モデル」はその言語観や方法論的特徴を「極大主義的(maximalist)」,「非還元主義的(non-reductionist)」,「ボトムアップ的（bottom-up)」として，生成文法理論の「極小主義」で「還元主義」かつ「トップダウン的」なアプローチとほとんどあらゆる局面で対立している。認知文法では「言語は慣例的な言語単位の構造化された目録(structured inventory of conventional linguistic units)」とされる(Langacker，1987：57)。なお，この「目録」なるものは，言語処理に用いられ得る意味的，音韻的，記号的な資源を大規模に集めたものとされ，ソシュールの言う「目録」とは似て非なるものである。また，「資源」には「言語的な単位のほかに，記憶，計画，問題解決能力，一般的知識，短期および長期目標が含まれ，さらに物理的・社会的・言語的コンテクストに関する理解の全体も含まれる(Langacker，2000：8-9)」。したがって，このモデルではいわばラングとパロールが互いを包含する脳内の「ランガージュ」的能力と雑多な非言語的要素を含む言語活動がすべて統合されたものをあるがままに対象とする，と解釈することもできる。

生成文法がＩ言語のような対象と抽象度の高い普遍的原理による能力の「説明」をめざしているのと対照的に，「使用依拠理論」の言語観は，「言語体系の実際の使用とその使用についての話者の知識に本質的な重要性を認める。文法は，より一般的なかたちに抽象化することが可能なものかどうかに関わらず，あらゆる種類の言語的慣習についての話者の知識を扱うものとされる。言語構造に対する非還元主義的なアプローチであり，相互の結びつきの様子の具体的な細部まで明示化されたスキーマ（＝具体事例から抽象化される共通性を備えた「テンプレート」）のネットワークを用い，抽象度の低いスキーマの重要性を強調する(Langacker，1987：494，Langacker，2000：1)」。

認知言語学での非還元主義というのは，文法には一般性の高い記述（規則）とともに，個人の言語使用の具体事例も含める抽象化・理想化の程度を下げることを指す。その根拠は，「個々の具現事例が実際本当に繰り返し使用される確立した言語的単位(unit)になるとすれば，心的実在性にとってはそうした記述が選ばれるべきだからである。また，そうした言語的な単位はそれ独自で認知的な単位であり，その存在はそれが具現している一般的なパターンの存在に還元されない」からだとする(Langacker，2000：2)」。

すでに触れたように，汎時的視点をとり，二分法とは相容れないようにみえる文法観・言語能力観であるが，生成文法との主たる争点である言語能力と言語使用の関係については，ラネカーは，「言語表現を作り上げるのは「文法」なのか，それとも言語の使用者があらゆる認知的・文脈的資源を用いることによるのか」という問いは取るに足りないように思われるかもしれないが，この違いはさまざまな言語的問題に重要な帰結をもたらす」(Langacker，2000：17）とする。しかし，「文法が言語表現をつくる」という表現は誤解を招きやすく，この問いに対する答は生成文法といえども否定のしようのない truism であり，問いかけとしてはあまり意味がないように思われる。言語表現を「作る」のも理解するのも「主体」に他ならず，（広義の）「文法」と他の諸々の認知的文脈的資源に頼るのは当然であ

り，この点は争点にはならない。認知文法が個人による言語使用を重視することを示す例として，ラネカーがあげている単語の意味拡張の例として，〝mouse〟という語が「(ハツカ) ネズミ」の意味から「コンピュータのマウス」に拡張される使用事象をとりあげてみよう。伝統的な扱いと異なり，ラネカーは，最初の使用事象からメタファーとしてネズミの一種のようにみなされたマウスの概念をもち，繰り返し使われるうちにこの複合的な意味がしだいに定着し慣例化していくことから，最初の事例からすでに言語体系の一部となっているとみる(Langacker, 2000：19)。これは，ソシュールの「ラングが生まれるもととなる契約が成立するためには，数千の個人のパロールが必要」(『原資料』丸山，1981：85) という古典的な二分法の根拠とは相容れない言語 (文法) 観である。このように，このモデルでは，話者の文法にある，より抽象的な表示と話者が経験する使用事象との関係は一般に想定されているよりもはるかに直接的だとみなされる。話し手の言語能力がそうした脳内の（累積的）言語処理によって構成され，言語運用がそれ自体，話し手の言語能力の一部とみる「こうした見解では，「言語能力」と「言語運用」を明確に分けるのはたしかに意味をなさないことになる (Kemmer & Barlow, 2000：ix, xi；Evans & Green, 2006：108f 参照)。」この論理はある意味で理解できるが，他方においては，たとえば，話す主体がさまざまな「類推」の主たる拠り所としているのは，いかに表現しようと，脳内に定着している広義の「文法」や「(言語) 知識」に近いものであろう。ラネカーも類推とスキーマの類似性は認めている (Langacker, 2000：59)。

言語運用を話者の言語能力の一部とみるこのモデルは，すでに述べたとおり，ハイムズやハリデイらにきわめて近いように見えるが，ハリデイが言語と社会（社会的人間）との一体性を全体的に理解し研究すべきだと考える (Halliday, 1978：12) のに対して，「言語構造は言語運用から創発される」(Tomasello, 2003：5) とする認知言語学では，汎時的観点から「あらゆる種類の言語習慣に関する話者の知識」，つまり個人レベルに準ずる言語能力の解明をめざすという根本的相違がある。

ことばの体系が閉ざされていないものだとしても，また対象を「使用事象」とするにしても，現実の社会では，言語使用が「あるがままのラングに縛りつけられている」（SM 126（1181））ことは，ラングを「スキーマ」のような概念に置き換えても否定しがたい。「マウス」のような例が比喩的な意味を獲得して定着する前に散発的に使われていたものはもちろん言語の一部でないとは断言できないが，個人に特異的な使用事象の段階にあるものと一般に定着して脳内「文法」とされるものを区別せずに扱うことが言語に関する「有意義な一般化」とどうつながるのかという疑問は払拭しにくい。もちろん，研究方略として，言語構造を（知覚，記憶，カテゴリー化などの）できるだけ一般的な認知能力から引き出し，「認知的妥当性が確立している道具立て」を使う限り，認知言語学を「現象論」とみる見方（酒井，2002：70）は当たらないだろうが，使用事象に関与する複雑多岐にわたる現象の扱いかたしだいではその危険性もなくはないように思われる。

6．おわりに――二分法を越えて

本稿の目的は，言うまでもなく，二分法をめぐる対立に白黒をつけることではなく，今一度，二分法に内在する矛盾やパラドックスの芽をさぐり，並存している理論や研究プログラムの間にみられる異論と対立の所以をあぶりだしてみることであった。しかし，この厄介な作業では当初から予想されたように，問題の在り処をぐるりと一巡して，平行線を確認しただけで出発点に戻らざるをえなかったことになる。

二分法を否定または無視するアプローチには「語る主体におけることばの問題」として，「パロールまたは performance の言語学」に見えるものも，ハリデイのように「知識としての言語」と「効果的なコミュニケーションに使用する能力」を統合して「行動潜在能力（behavior potential）」（Halliday，1978：13）とみる立場でも，実際には，いずれも抽象度を低く設定していても，現実の言語使用の観察と内省を通じて，背後の定着した規則性を習得した能力を問題にしていることには変わりがない。二分法否定派

の認知文法は，記述対象としての「脳内」文法を「言語使用によって形成され，維持され，修正されるたえず進化する一連の認知的ルーチンとして動的にとらえ」，またそうした文法が「さまざまな定着度の，さまざまな抽象化レベルを表す構造が範疇化，合成，象徴化の関係においてともに結ばれている巨大なネットワーク」(Langacker，2000：5) だと想定する。このモデルの「一連の言語的パタンにまったく個人に特異的なものから最も一般的なものまで」を認める「ボトクアップ志向性」も，結局は，共同体の言語として機能するからには，個人レベルだけでは定着も一般化も意味がないのであり，いくら境界が流動的であろうと，ある時点でその中核には慣例化し，社会の成員がほぼ共有し「コード」化した部分を想定しているはずであり，そうした脳内「文法」をどうみるか，どう呼ぶかは単なる「術語ゲーム」ではすまされない根本的な問題にならざるをえないであろう。近年では多くの言語研究で二分法があまり意識されていないが，二分法の垣根を取り払うこと自体が原理的に問題だとは言えない。しかしそのような場合でも，どういう対象の一般化なのかは常に問題にされなくてはならないであろう。

抽象度の違いはあっても，たがいに平行線を辿っているようにみえる理論やモデルも理論である以上は，研究プログラムとして，なんらかの対象を定めて言語学的に有意義な一般化をめざしているはずであり，それがどの程度達成されているかが問題になるわけである。極小理論は「できる限り多くのものを原理づけられたものにして，どこまで研究を進められるかの努力 (Chomsky，2004：158)」だとされるが，対立する認知言語学も原理づけが究極の目標かどうかはともかく，「スキーマ」などの概念を使う限り，「より一般的なかたちに抽象化する」ことを目ざしているはずである。古典的な二分法を越えたようにみえるこの理論や体系機能文法あるいは社会言語学的アプローチなどにおいても，社会に共有されている知識の体系と現実の言語使用における個人的偶発的なものをまったく区別する必要がないことを示す議論はまだ十分説得性があるようには思われない。たとえば，ソシュール (CLG，27) も触れている失語症を説明する場合，おそら

く失文法失語（agrammatical aphasia）を除いては，多くの場合，なんらかの形でラング（言語能力）的なものとパロール（言語使用）的なものを分けることが必要になると考えられる。

言語能力と言語運用の相互依存性を認めることや言語使用や話す主体を重視することと二分法を否定することとはかならずしも連動しているわけではない。この意味で，チョムスキーが「competence／performance の区別をどうして否定できるのか理解できない……それは概念的区別なのだから。認知的状態と活動の間の区別を支持する証拠も支持しない証拠もない（Smith，2004：114）」と述べているのは理解できる。一方，言語使用能力と言語能力の相互作用の解明に対する生成文法の冷淡さはいささか理解しがたいものがある。チョムスキーは「言語使用能力」のようなある種の人間の能力はそれだけ取り出しても理論的に説明できないとする哲学者 Hirary Putnum を援用して，（多分に認知文法を意識してか）「現実の経験世界でのコミュニケーションは解釈者（interpreter）の研究であるが，これは「あらゆることの研究」という研究主題がないというありふれた理由で経験的探求の主題とはならない（Chomsky，2000：69）」と断じてはばからない姿勢は，言語使用の原理の探求にあたり「あらゆることの研究」にならないために一般性のある射程の広い概念（「認知的妥当性のある」）の道具立てによる研究をめざすモデルやアプローチには容易に受け入れがたい見解であろう[16]。

あらためて強調するまでもなく，言語学は経験科学であり，さまざまな想定にもとづいておこなわれる理論や研究プログラムで得られた結論や「真理」はあくまで仮説としての科学的考察の対象であり結果であって，包括的な説明理論や判断基準に関する合意がない現段階では，競合する理論やアプローチの利点や妥当性を判断する手がかりの一つにすぎない。言語学の対象をめぐる認知的状態と認知活動の区別と二分法への姿勢は，これまで見た対立する各理論の言語観から伺えるように，理論の出発点であると同時に研究プログラムと方法論に関する重要な帰結をもたらしてきたが，そこで顕わになった溝は埋めがたいものがあり，二分法をめぐる論議

は平行線をたどりながら，今後とも終焉する見通しはなさそうである。

注

＊本稿は，2005年6月の北海道大学における第50回認知機能言語学談話会での講演の一部を加筆修正したものに基づいている。

1）米国における言語学の学説史や包括的な回顧については，Hymes & Fought（1981）やSampson（2001）などを参照。

2）ソシュールが「二つの観点―共時論的と通時論的―の対立は，絶対的なもので，妥協を許さない」(『一般言語学講義』(以下CLG)，119)という区別は「アプローチの違い」にすぎないとしても，その原理をめぐっては，言語変化を体系的，関数的なものとみなすプラーグ学派から，最近では言語研究における汎時的（panchronic）なアプローチを表明している認知言語学にいたるまで，依然としてその見方が分かれている。なお，汎時的アプローチの可能性に関するソシュールの考えは，CLG (134-5) に見られるが，そこでは特定共時的次元と通時的次元との性格の違いに触れ，その対立は動態と静態の対立であるとし，言語を汎時的観点から研究できないかという問いに答えるかたちで述べられる。ソシュールは，言語的でないものは「疑いもなく可能」だが，言語的なるものは不可能だと断じて，「音韻変化はいつでも生じており，今後も生じるであろうから，この一般的現象をもって言語活動の恒常的様相のひとつとみなすことができるからだ。したがって，それはその法則のひとつであることには変わりない。言語学にはチェスと同様，あらゆる事件をへて残存する規則がある。しかし，それらは具体的事実とは独立に存在する一般原理である。手を触れることのできる個々の事実の話となると，汎時的観点なるものは存在しない。したがって，音韻変化はその範囲がいかに大きくとも，一定のとき，一定の領土に限られている(CLG, 134-5, 小林訳, 126-7)」と述べている。なお，『原資料』の対応箇所の記述もほぼ同趣旨である(丸山，1983：150を参照)。

3）ファースは，たしかにソシュール理論の多くを認めないが，言語学が扱うのは具体的な要素ではなく抽象的要素であると考えていた。またファースは，ウィトゲンシュタインの意味用法説，「語の意味はその使用にある」を受け継いだ「語は付き合う仲間によって分かる」(Palmer，1968：113，179)という意味観で知られるが，「付き合う仲間」とは習慣的な定着した語結合の「連語」(〝collocation〟)を指しており，この見方が二分法を否定する論拠になるとは考えられない。

4）ドイツの哲学者 Habermas も似たような提案をしている（Parret，1974：347）。

5）チョムスキー自身は，語用論やグライスの会話の公理のようなものに冷淡だったというわけではない。70 年代初期にチョムスキーは，人間の行動にかんするより広範な理論の一部として文法や意味論や語用論が組み込まれるという構想そのものに反対でないこと，またグライスの公理が首尾よく達成されたコミュニケーションの理論への重要な貢献であることを認めている。そして同時に，（やや我田引水的ながら）こうしたアプローチは生成文法理論の発展の根底にある理想化を正当化するものとしても興味深いと述べたことがあり（Parret，1974：45-6）。チョムスキーはその後も言語知識の一部としての「語用論的能力」に度々言及していることは周知のとおりである（Chomsky，1980：224-5，etc.）。

6）ソシュールの各国での扱いや主要な論争を学説史的にたどったものとしては，ムーナン（1970），デ・マウロ（1976），丸山（1981；1983），ケルナー（1982），などを参照。とくにムーナンとマウロのものは本稿でほとんど触れていないヨーロッパでのソシュール評価とその変遷を簡潔に要約しており有益である。なお，言語学以外の分野でのソシュールのラング・パロールその他の諸概念に関する誤解と曲解については当然，本稿の扱えるところではない。

7）Lepschy（1970：47）もソシュールは，ラングが「具体的な性質をもつものであることをわざわざ強調している」と述べている。なお，土屋の見方は，部分的に，時枝（1941，1955）の議論を想起させる側面もあるが，時枝のソシュール批判にたいしては，服部（1990），丸山（1980：85-6），イ・ヨンスク（2002：21-6）らの批判を参照。なお，時枝のソシュール批判は「翻訳」を通してのもので「的外れ」（丸山，1980）という批判もあるが，時枝が「言語過程説」で，言語の意味を話し手が主体的に形成していくものとする考え方を主張して，いわば認知意味論の先駆者になっているとの評価については野村（2002）を参照。

8）ソシュールの CLG については，「ソシュール学説のもっとも完備した集大成（デ・マウロ，1976：XVI）」とも「ソシュール自身の思想を忠実に表していない（丸山，1983：17）」ともいわれることから，必要に応じて，1955 年以降に発見され編纂された原資料や講義ノート（一括して『原資料』とする）に言及する。なお，米国でのソシュール論が近年でも CLG に基づくものが多いことは念頭におく必要がある。

9）哲学者の Bouveresse は，デカルトの心身二元論を批判した G・ライルの

「機械のなかの幽霊 (Ghost in the machine)」表現にならって，チョムスキーの『デカルト派言語学』を評して，「魂（soul）のないデカルト主義，二元性(duality) のない二元論 (dualism)」としてその機械主義を批判したことがある（Parret，1973：327)。

10) イエスペルセンも「内的概念」のようなラング的概念を念頭においていたことは知られており，パロールを扱ったというブルームフィールドの批判は必ずしも当たらない。Hockett によると，ブルームフィールドも理論ではラングーパロールの二分法を認めるという「過ちを犯した」が，実際の言語データの扱いでは間違ってはいなかったという (Hockett，1968：65)。これは実際の言語データ（speech）を通じて，言語的一般化を行う方法論を採用したことを指す。なお，ソシュールの文の扱いについては，すでによく知られているように，CLG の数箇所（148f（小林訳，141)，ほか）に言及があるが，とくに「パロールの特質は，その結合の自由さである。それゆえ，統合のすべてが等しく自由かどうかを問う必要がある」(CLG，172，小林訳，165) と述べていることが注目される。個人が自由に変えられない語や成句以外の句や文をパロールとした問題については，Wells (1947) も触れている。また英語圏で比較的早くソシュールに触れた Gardiner (1951，初版 1933 年) は英語圏としては比較的早く二分法を世に問い，言語知識（「科学」）としての抽象的な language と具体的な行使（言語活動）としての speech との区別と相互依存性を認めているが，語と文の扱いでは，ソシュールと同様，「文は speech の単位であり，語は language の単位である」としている (Gardiner，1951：88，108)。なお，学説史の観点からの解釈については，フランスの哲学者 Bouveresse（Parret，1974：303）や Matthews（1993：9）などを参照。

11) ムーナンは，ソシュールの米国への翻訳が遅れた事情がブルームフィールドにあると示唆して，「その全性格，おそらく自分が完全に科学的な最初の言語学の創始者たらんとする専制君主のような欲望がなせるわざで，ソシュールの名と思想については沈黙を守っている」(ムーナン，1970：99) と述べているが，これは初期のブルームフィールドが CLG の第二版を好意的に書評していることや Bloomfield（1933）でのソシュールへの言及を見逃した（あるいは無視した）ことによる誤解であろう。なお，本稿の議論とは直接関係はないが，ブルームフィールドもチョムスキーもソシュールを誤読・誤解していることについての詳細は，Joseph（1990）と Harris（2003）を参照。

12) ブルームフィールドなど構造言語学者も言語分析が母語話者の内的能力に答える必要があるという想定は共有していたと思われ，Hockett (1952b：98)

自身も「基底の習慣」（'underlying habits'）という言い方でこれに相当するものがあることを示唆している（Hymes & Fought, 1981：163）。

13）ホケットは便宜的に仏語の英語への翻訳において通例であるように（またおそらくはGardiner (1951) の区別を引き継いで），〝langue〟をlanguageと同義とし，〝parole〟をspeechで言い換えている。

14）ソシュールが『原資料』で，ベートーベンのソナタや交響曲（曲）をラングに喩え，その演奏をパロールに喩えているが，これも二分法の規定と必ずしも正確に対応するものでないことは，丸山（1981：88）の指摘する通りである。なお，マルティネが「伝統的なラングとパロールはコードとメッセージという観点から表すことができる」（Martinet, 1961：284）としたこともよく知られているが，この比喩でも，とくにパロールとメッセージの類似性はごく限定的なものといわなくてはならない。この比喩については，丸山（1981：284）も一面的と批判しているが，これは言語学の入門書というマルティネの原著の性格から詳細な解説を抜きにしていることにもよるであろう。

15）Hockettは，後年の認知言語学と同様，言語は，人工的なゲームであるチェスや野球や，数学や論理学のシステムのようなwell-definedなシステムではないとみる。

16）チョムスキーは，すでに注（5）で触れたように，折にふれて言語活動におけるcompetenceとその一部である語用論的能力の重要性に触れてはいる。

参考文献

Barlow, M. & Kemmer, S., eds. 2000. *Usage Based Models of Language*. Stanford, CA: CSLI Publications.

Belletti & Rizzi, eds. 2002. *On Nature and Language*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.

Bloomfield, L. 1923. Review of Saussure. *Modern Language Journal* 8: 317-319. Also in Hockett (1970), 106-108.

_____. 1927a. On recent work in general linguistics, *Modern Philosophy* 25: 211-230. Also in Hockett (1970), 173-190.

_____. 1927b. Review of Jespersen's Philosophy of Grammar. *Journal of English and Germanic Philology* 26: 444-446. Also in Hockett (1970), 141-143.

_____. 1933 (1935). *Language*. New York: Holt (London: George Allen & Unwin).

_____. 1939. *Linguistic Aspecst of Science*. International Encyclopedia of Unified Science Vols I and II: Foundations of the Unity of Science Volume 1, Number 4. Chicago: University of Chicago Press.

Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances-The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.

Chomsky, N. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, MA: The MIT Press.

_____. 1966. *Cartesian Linguistics: A Chapter in the History of Rationalist Thought*. New York and London: Harper & Row.

_____. 1968, 1972 (2nd ed.), 2006 (3rd ed.). *Language and Mind*. New York: Harcourt Brace Jovanovich.

_____. 1980. *Rules and Representations*. New York: Columbia Univ. Press.

_____. 1982. *Noam Chomsky on the generative enterprise: a discussion with R. Huybregts and H. van Riemsdijk*. Dordrecht: Foris.

_____. 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, MA: The MIT Press.

_____. 2000. *New Horizons in the Study of Language and Mind*. Cambridge, UK and New York: Cambridge Univ. Press.

_____. 2004. *Noam Chomsky on the Generative Enterprise Revisited: Discussions with R. Huybregts and H. van Riemsdijk, N, Fukui and M. Zushi*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter. (2004年版邦訳＝ノーム・チョムスキー，福井直樹，辻子美保子訳．2003．『生成文法の企て』東京：岩波書店．)

Culler, J. 1976, 1986². *Ferdinand de Saussure*. London: Fontana Press.

カラー，J.，川本茂雄訳．1978 (2002)．『ソシュール』東京：岩波書店．

デ・マウロ，トォリオ．山内喜美夫訳 1976．『ソシュール一般言語学講義校注』東京：而立書房．

(De Mauro, T. 1970. *Ferdinand de Saussure CORSO DI LINGUISTICA GENERALE: Introduzione, traduzione e commento id Tullio De Mauro*. Prima edizione riveduta.)

Evans, V. & Green, M. 2006. *Cognitive Linguistics: An Introduction*.

Edinburgh: Edinburgh Univ. Press.

F・ガデ，立川健二訳．1995．『ソシュール言語学入門』東京：新曜社．

(Gadet, F. 1987. *Saussure: Une Science de la Langue*. Paris: Presses de Universitaires de France.)

Gardiner, A. 1953. *The Theory of Speech and Language*. 2nd edition. Oxford at Clarendon Press.

Halliday, M.A.K. 1978. *Language as a Social Semiotic: The social interpretation of language and meaning*. Baltimore: University Park Press.

_____. 2004. *An Introduction to Functional Grammar*. 3rd ed. London: Arnold.

Harris, R. 2003. *Saussure and His Interpreters*. 2nd edition. Edingburgh: Edinburgh University Press.

服部四郎．1960．『言語学の方法』東京：三省堂．

Hockett, C. 1968. *The State of the Art*. The Hague: Mouton.

_____. ed. 1970. *A Leonard Bloomfield Anthology (LBA)*. Bloomington: Indiana University Press.

Hymes, D. 1972. On communicative competence. In J.B. Pride & J. Holmes (eds.), *Sociolinguistics* (pp.269-85). Harmondsworth: Penguin.

Hymes, D. & Fought, J. 1981. *American Structuralism*. New York: Mouton Publishers.

イ・ヨンスク．2002．「国語学・言語学・国学」，『日本の言語学—30年の歩みと今世紀の展望』『言語』（30周年記念別冊）：15-26．東京：大修館．

Jenkins, L. 2000. *Biolingusitics: Exploring the Biology of Language*. New York: Cambridge University Press.

Joseph, J. 1990. Ideologizing Saussure: Bloomfield's and Chomsky's readings of the *Cours de linguistique générale*. J. Joseph & T. Taylor, eds. *Ideologies of Language*. London: Routledge.

Joos, M. (ed.) 1957. *Readings in Linguistics I*. Chicago: The Univ. of Chicago Press.

E・F・K・ケルナー著，山中圭一訳．1982．『ソシュールの言語論』東京：大修館書店．

(E.F.K. Koerner. 1973. *Ferdinand de Saussure*. Friedr. Vieweg, Sohn GmbH, Barunschweig.)

Lakoff, G. 1973. Fuzzy grammar and the performance/competence termi-

nology game. *CLS 9*: 271-291. Chicago: Chicago Linguistics Society.

Langacker, R. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol. I Stanford, CA: Stanford Univ. Press.

_____. 2000. A dynamic usage-based model. In Barlow & Kemmer, 2000: 1-63.

Labov, W. 1972. *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press.

Lepschy, G. 1970. *A Survey of Structural Linguistics*. London: Faber and Faber.

丸山圭三郎. 1980. ソシュール・その虚像と実像.『現代思想』1980年10月号(東京：青土社)：84-102.

_____. 1981.『ソシュールの思想』東京：岩波書店.

_____. 1983.『ソシュールを読む』(岩波セミナーブックス2)東京：岩波書店.

_____.(編) 1985.『ソシュール小事典』東京：大修館書店.

Matthews, P.H. 1993. *Grammatical Theory in the United States from Bloomfield to Chomsky*. Cambridge: Cambridge University Press.

ムーナン, G., 福井ほか訳. 1970.『ソシュール―構造主義の原点』東京：大修館書店.

野村益寛. 2002. 意味論研究史管見―認知言語学の視点から,『日本の言語学―30年の歩みと今世紀の展望』『言語』(30周年記念別冊) pp.118-129. 東京：大修館.

Newmeyer, F. 2001. The Prague School and north American functionalist approaches to syntax. *Journal of Lingustics, 37*, 101-126.

Palmer, F.R. ,ed. 1968. *Selected Papers of J.R. Firth 1952-59*. London: Longmans.

Parret, H. ed. 1974. *Discussing Language*. The Hague: Mouton.

Pateman, T. 1987. *Language in Mind and Language in Society*. Oxford: Oxford Univ. Press.

Postal, P. 2003. (Virtually) conceptually necessary. *Journal of Linguistics*, 39, 599-620.

_____. 2004. *Skeptical Linguistic Essays*. Oxford & New York: Oxford Univ. Press.

坂原茂(篇) 2000.『認知言語学の発展』東京：ひつじ書房.

酒井邦嘉．2002．『言語の脳科学』東京：中央公論新社．

Saussure, F. de. 1922 (1968). *Cours de Linguistique Générale*. Paris: Payot.（邦訳：小林英夫『言語学原論（一般言語学講義）』（1940，改訳新版）東京：岩波書店．）

Sampson, G. 2001. *Emipirical Linguistics*. London: Continuum.

Smith, N. 2004. *Chomsky*. 2nd edition. Cambridge: Cambridge University Press.

Sperber, D. & Wilson, D. 1995. *Relevance: Communication & Cognition*. 2nd ed. Oxford: Blackwell.

土屋　俊．2005．近代言語学の歴史，月刊『言語』2005 年 4 月号：22-29．東京：大修館．

時枝誠記．1941．『国語学原論』岩波書店．

_____．1955．『国語学原論・続編』東京：岩波書店．

Tomasello, M. 2003. *Constructing a Language*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Wells, R. 1947. De Sassure's system of linguistics. *Word 3*. 1-31. Also in Joos, 1957: 1-18.

Widdowson, H. 1979. *Explorations in Applied Linguistics*. Oxford: Oxford Univ. Press.